



「あのっ おっばい、あのっはじめまして。おっばいっ、ボク王子の・・・おっばい！」
くおっきなおっばいだなあ！ 優しそうで素敵な女性だっ！ あっ乳首がもう立ってる！
乳輪と乳首が濡れてヒクヒクしてるうっ！ あれ、片方だけ濡れてる？ もしかしてっもう

誰かに舐められたのかな！ぼくも舐めてもいいよねっ！>頭のなかでシンデロラ（母）とセックスしている処を思い浮かべる。おっぱいを見ながらビクビクツカクカクッ、ビキニブリーフの先からびゅぶびゅぶ、我慢汁が溢れた。

「んふっ何処を見てるの？」

シンデロラ（母）は可愛く微笑みながら顔をかしげる。

ポインポインッ　ぶりゅんぶりゅんっ！

シンデロラ（母）は手を後ろで組み　おっぱいを突き出した。ぶりゅん！ぶりゅんっ！ぶりゅん！ぶりゅんっ！

「はああ！　凄っ！！おっぱいっおっぱいっ！ポインポインッ！！」

王子はチクビの目の前に顔を持ってくる。

シンデロラ（母）のでかばいしか見ていない。気が飛びそうになる。

「えっ？ポインッ？おっぱいがどうかしたのっ？（ぶるぶるぶるぶる～っおっぱいを横に激しく揺らす）　んふっ　このおっぱい舐めたり、モミモミしたりいペロペロするのは後でのお楽しみっ！今日は私のこと　お母さんだと思って一杯甘えてね？お母さんのコレで一杯遊んでっ（たぷんたぷん！）」

「え！じゃ　じゃあこのおっぱいは！」

ドキドキドキキッ！！　ポインッポインッポインッポインッ！シンデロラ（母）は飛び跳ねる。

「そうっお母さんのおっぱいよっ」

「いひい！」

王子の身体に電流が貫いた。でかばいはそれを受け入れるようにでんと突き出されている。

王子の目の前に乳首がある。乳首がヒクヒクしている。頭一つ大きいシンデロラ（母）。シンデロラ（母）は王子の手を両手で優しく握り込みながら王子の耳元で囁いた。

「今日はお母さん、パイパンマ　コなの。あとでいっぱい　いろいろしてえ～」

そのあとで優しく微笑んだ。乳首が濡れたでかばいがぶるんっとな揺れる。

「じゃ、じゃああさ！はやく　早くしゃぶって　しゃぶってええ！」

「はっきり命令しないとわからないわ　母さんとシックスナインするの？　母さんに何をしてもらいたいの？王子」

「俺のをお口でじゅるウウ～って！」

「ち　ぽをじゅるるうう～っ??」

「俺のち　ぽをっ　くわえろおおお！」

会場には 1000 人を越すドスケベ女たちで賑わっていたが　王子の大絶叫が支配した。しんと静まり返る会場。

ズルンッ　ビキニブリーフをズリ下げ、

しんとした中で　一気にしゃぶりつく音が響いた。

「じゅるぞぽおおおおおっ！」

シンデロラ（母）は一気に啜え込んだ。

「んぬはあああああああっ～！」

王子は上を向いてのけぞって吠えた。

歓声と拍手が巻き起こる。おっぱいたちが二人を取り囲む。

<ここで覚えてもらおうわ！ここで教え込むわ！私のお口テクニクッ！覚えなさいっ覚えてもらおうわっ！！！>

大勢の観客に見つめられながらのけぞる王子。

「はぶう！」

「んひい！」

「ぶちゅぽっ！」

「あひ！」

いたるところで声が上がった。所々でフェラチオが開始されたようだ。

シンデロラ（母）も必死に咥え込んだ。王子の目を見つめて離さない。

「んっ！んっ！んっ！んっぶ！んっぶ！」

王子は身悶えしながらも 心に流れ込んでくる愛情を感じ始めていた。

母親のいなかった王子、母親の愛にずっと飢えていた。王子は母親にしゃぶられてるような気持ち良さと安心感を感じ始めていた。

母親を感じていた、が母親は激しかった。

王子はシンデロラ（母）の頭をがっしりとつかむと腰を振り始めた。シンデロラ（母）は飲み込むようにしてそれに応えた。夢中でくわえ込んだ。必死で舌を絡みつかせた。

「ふうう！ふううっ！うーっ！」

王子は頑張って突き出して耐える。れちよれちよ。くっぽくっぽ。シンデロラ（母）は執拗にち ぽの先っぽを攻め上げる。それでも耐えきれず王子は腰をくねらせた。

「あの女 王子のハートを見事に射止めたわね はぶうっ！？」

そういった女は正常位で襲いかかられ、髪を掴まれながら口にち ぽを突っ込まれていた。

ささやかな晚餐、どうみてもシンデロラ（母）の世界とはかけ離れた豪華絢爛な食事会、その場は大乱交の場へと変わった。

興奮した男どもが駆け足でそれぞれのお目当ての相手へ走っていった。

そのなかでシンデロラ（母）は王子に 100%の母性を注いでいた。微笑みながら優しくしつこく激しく王子のち ぽを追いかけて回して舐め廻した。全体を舐めあげ舐め尽くしつついばみ、しゃぶりついた。王子だろうと容赦しない動き。

「ふー！ふ～っ！ふうう～っ！あ～っ！」

シンデロラ（母）の口淫攻めに仁王立ちで涙目になりながらなんとか頑張る王子。腰を突き出して頑張るしかない。気持ち良すぎて時々つま先立ちになり 腰を引き内股になった。

どんな体制になっても、追い込んでくる口マンコが啄んでくる。れちよれちよれちよれちよチン先に押し付けられた舌が動く。じゅぽじゅぽじゅぽじゅぽっ窄められた口で啄まれる。じゅるぞぽっじゅるぞぽっ じゅるぞぽおおおお！根本まで飲み込まれ吐き出され飲み込まれる。

「ふうぐうう～っ！」

快感が走り上を向く。

「ああああー！！ 母さんっ！もっもう！イッチャいそうっ！」王子は大勢の中で叫んだ！

がくがくがくがくっ ぶるぶるぶるぶるぶるうっ

王子の体を快感が襲う。腰が勝手に前後に震える。シンデロラ（母）は喉奥まで飲み込んだち ぽをぶぽおっと引き抜いた。

攻めが止む。ニコニコ。シンデロラ（母）が笑っている。舌先が尿道口をチロチロ擦り続けている。

「そう、それでいいの。もっともお～っと正直になってえ？周りの人に聞こえるようにっ母さんって叫んでェ！くすっもういきそうなのね？まだはじまったばかりなのにっクスッ いいわよお？イッテも。その代わり今日はいっぱいイカせるわよお～？イク時は 母さんっ！ イグウウ～！っていいなさい？イクウじゃなくってえ～ イグウよ おお～？」

王子は母親の愛情たっぷりにしゃぶられながらおっぱいもじっくり見ていた。揺れるおっぱい。真ん中で揺れて外側に弾けでるおっぱい。シンデロラ（母）の動きに合わせて揺れるおっぱい。ポインポインなおっぱい。シンデロラ（母）が小刻みに動くと軌道からはみ出てポインッと弾けるおっぱい。デカパイが王子の興奮を煽り続ける。シンデロラ（母）は王子の手を握っていた。

「ふっぐ 母さんっ ふっぐ 母さんっ！」

シンデロラ（母）のカワイイお口めがけて腰を振りまくった。

ぽっちゅ！ぽっちゅ！ぽっちゅ！ぽっちゅ！ちゅっぽちゅっぽおおーっ！

回転スタンピングフェラと口の中で前後の舌の磨き上げ。王子のち ぽは嬉しそうに何度も何度も跳ね上がる。

「母さんっ イグウウ～っ！！」王子は咥えられたまま盛大にのけぞり唸って、果てた。ドビュドビュッ、ドビュドビュウ。可愛いシンデロラ（母）のお口に精液がドビュッドビュッと注がれていく。

「ちゅっ ぢゅぢゅぢゅ～～～！」

「うくっ！あっ！あぁっ！」

シンデロラ（母）は可愛いお口でそんな王子のち ぽを吸い上げた。しゃくりあげ口の回転を止めなかった。むしろ激しく貪られた。王子は身を左右にくねり悶えるが 左右に握られた指同士により逃げられない。

びゅびゅっつ ぽたぽたぽた。びゅぷびゅぶっ びゅっぷう。

シンデロラ（母）の咥えこんでいる口の隙間からち ぽ汁が溢れて零れ落ちていく。

「うっ！うっ！うっうぐうっ！」

シンデロラ（母）の連続フェラ。

王子の目を見つめながらゴクゴク精液を飲み込んだ

若いち ぽはそうそう簡単に射精を終えることはなかった。

ぬるぬるになったち ぽは口のスライドによって更にぬめぬめとなっていく。シンデロラ（母）の口が萎えることを許さず勃起させたままにした。

しばらくして残骸を吐き出すち ぽに数回フルートを弾くと解放し、シンデロラ（母）は立ち上がり、横から王子を抱きしめた。でかぱいを顔の横から力強く押し付けた。王子はこんなに感じたのは初めてだった。

むにむにい、むにゅむにゅう！何度も何度も押し付けられるでかぱい。

「んふ、こんなに感じたことがなかったのかしらっ」

あまりに激しいフェラチオの余韻で腰が勝手にかくかくし、ち ぽからびゅっびゅっと残り汁を飛ばしながら目に溜まった涙を乳首が拭いた。

「ほおらっほらっ お母さんからのご褒美よお〜！」

シンデロラ（母）はでかぱいを王子の顔にこすりつける。釣鐘型のデカパイが潰れるまで。物凄い弾力でおっぱいが王子の顔を包み込んだ。正面から抱きしめた。

「王子のち ぽ とっても美味しかったわ」と耳元で優しく囁いた。

「今度はあなたの番よ？わたしを感じさせて・・・」